

いきもの ふれあいの森 通信

2026.1.21 第14号



本年もよろしくお願いいたします

アルプス公園「ふれあいの森」は、自然観察に適した場所で、年間を通して里山の動植物にふれあうことができます。冬季は木々が葉を落とし見通しがきくため、野鳥観察のベストシーズンといえるでしょう。この時期、多くの野鳥愛好家がふれあいの森を訪れます。1月に入って観察された野鳥などを紹介します。

●野鳥

冬に見られる鳥の中でもルリビタキの雄の成鳥は美しい青光りする美しい羽を持つため、これを見ようと多くの野鳥愛好家が訪れます。



美しい♂成鳥 2026. 1. 6



ジョウビタキ♂ 2026. 1. 6

ジョウビタキは冬鳥の代表格として知られていましたが、近年、大陸の繁殖地に戻ることなく日本国内で営巣・子育てするケースが増えてきています。最初は標高の高い場所だけでしたが、最近では都市部へも進出し、建物などの構造物で営巣するケースもあるようです。なぜジョウビタキが留鳥化しているのか、詳しくはわかりません。



実を啄むシメ 2025. 12

シメも比較的よく見ることのできる冬鳥です。日本でも北海道では繁殖をしていますし、私も夏に繁殖中とみられるシメを霧ヶ峰で見たことがあります。アトリの仲間特有の大きく頑丈なくちばしで、カエデの実などを啄む姿を見掛けます。

●植物・昆虫

メジロが舐めていたのはオニグルミの樹液です。



オニグルミの樹液を舐めるメジロ 2026. 1. 6

年々樹液の出始める時期が早まっているように思います。今年は特に早いですね。わずかに染み出した樹液を小鳥たちは見逃さず、代わる代わる舐めていきます。この日訪れたのはメジロとシジュウカラでした。

公園内のあちらこちらに白く薄い実を房のように付けた樹木を見掛けます。これは中国原産の帰化植物、ニワウルシ(別名シンジュ)です。この時期、翼のついた種子が風に飛ばされていくのをよく目にします。公園内の開けた場所でひこばえをよく見かけますが、そのままにしておくとうちに高木化するので管理上、注意する植物と言えるでしょう。昨年は中国原産のシンジュキノカワガの幼虫が園内で発生していましたし、今年はやはりブドウの害虫としても知られるシタベニハゴロモという中国原産の外来種が松本市内で3匹発見されました。いずれもニワウルシを足掛かりに進出してきた昆虫たちです。(文責:那須野 雅好)



たくさんの種子を飛ばすニワウルシ 2025. 12. 11

●哺乳類

園内には様々な哺乳類も生息しており、痕跡(フィールドサイン)だけなら意外と見つかります。

昨年12月、さくらの森を水路方向へ抜けた道路沿いに、雑食動物の「ためフン」を発見しました。



古いものから新しいものまで大量のフンが積み重なっており、かなりの規模のものです。内容を調べてみると、果実の種子や皮、虫の殻、植物に含まれる繊維質、それからちぎれた布などが出てきました。動物の毛や骨などは見つからず、ほとんどが植物質でした。ためフンをする雑食動物としてよく知られているのはホンダタヌキとハクビシンです。一体どちらのものなのか、この時点では不明でした。しかし後日、うっすら降り積もった雪のおかげで主が判明しました。



丸い4本指と、その上の爪が目立つ足跡。イヌ科のホンダタヌキです。ホンダタヌキはためフンを複数頭で利用するため、これだけ大きなためフン場になったのも理解できます。



そして後日、別の林の中に同じく雑食動物のためフンをもう一つ発見。

よく見てみると、一か所目のためフンからでてきたものと全く同じ赤い布が混じっているのが分かります。断定はできませんが、フンの主は恐らく同じ個体のようです。2つのためフン間の距離は500mほどしか空いていない上に同じ道路沿いだったので、同じ個体群が行き来していてもなんらおかしくはありません。

来園者の皆様も容易に見つけられる場所ですので、ぜひ観察してみたいはいかがでしょうか。

(文責 小鳥と小動物の森)